

The Unacknowledged Threat - Secret and Covert Operations by the USA

published in the August 2004 issue of the World Affairs Journal

Updated 08-18-04

Steven M. Greer

認められざる脅威 - 米国による隠された秘密工作

ワールド・アフェアーズ誌 2004 年 8 月号掲載

2004 年 8 月 18 日更新

スティーブン・M・グリア

([公開プロジェクトのウェブサイトより](#))

第二次世界大戦の終結以来、米国の軍産複合体は密かに莫大な公的資金を使い、エネルギー発生、大気圏内外飛行、未来兵器といった、大部分が軍事目的である新技術の研究開発を主導してきた。それらの新技術が公共の利益のために提供されたことはない。しかし今日、環境および経済の非常事態が出現するに及び、蓄積された技術情報を人類の利益のために平和利用することが、否応なく求められている。

“独自の空軍、独自の海軍、独自の資金調達機構、そして独自の国益を追求する能力を持ち、あらゆる抑制と均衡の束縛を受けず、法そのものからも自由な、陰の政府が存在する”

- 上院議員 ダニエル・K・イノウエ

“政府の様々な評議会において我々は、それが意図されたものであるか否かにかかわらず、軍産複合体による不当な影響力の支配を警戒しなければなりません。根拠のない権力が台頭し、破滅的な力をふるうという危険性が存在し、これからも存続するでしょう。この複合体の重圧が、我々の自由と民主的なプロセスを危機に陥れることを許してはなりません。何事も当然のことと考えるべきではないのです。用心深く見識のある市民のみが、平和的な方法と目的とによって、この国防という巨大な産業と軍事の機構に適切な網をかぶせ、安全と自由を共に繁栄させることができるのです”

- 大統領 アイゼンハワー、1961 年 1 月

上記の演説は、共和党员として合衆国大統領を二期務め、陸軍五つ星将軍でもあったドワイト・アイゼンハワーが 1961 年に政権を離れるとき、将来を予見した警告として語ったものである。多くの人々は、あのような保守的かつ親軍政の大統領がなぜこのような警告を発しようとしたのか、不思議に思っていた。今、我々はその理由を知っている。

米国に本拠を構える民間非営利団体の公開プロジェクト (The Disclosure Project ; ディスクロージャー・プロジェクト) は、超憲法的に活動する違法なプロジェクトを証言する軍、情報

機関、企業の数百人に上る証人を確認している。それらの違法なプロジェクトは情報を隠蔽し、石油、石炭、原子力など、従来型エネルギー源の決定的な代替となり得る技術を一般社会が利用することを阻んできた。これらの技術は、米国、英国を始めとする諸国の軍産利害勢力が獲得し発展させたものであるが、彼らは合法的な当局機関および一般社会に対して繰り返し嘘をつき、この情報を公表しないできた。この情報は技術、エネルギー生産、推進、石油とエネルギー供給に関係する環境および地政学的問題の諸分野において、世界の現状を完全に転換する可能性を秘めている。要するに、これらの技術の賢明な応用により、持続可能で無汚染かつ豊かな文明を創造することが可能であった。また、このような技術の知識が意図的に抑圧されていなかったならば、国際社会が直面している最も差し迫った危機の多くは、回避されていたはずである。いわゆる“国家安全保障上の懸念”がこのような秘密の理由とされてきたが、実際には石油業界、化石燃料業界、および関連する特別利益団体の優位性を基盤とする現体制維持への強固な意志が、その政策の動因である。

アイゼンハワー大統領が政権を離れる時まで、西側陣営の軍事、情報、企業の計画には構造転換が起きていた。ソ連との間の核軍備競争および冷戦という緊迫した圧力が、極度の秘密主義を生み、それは第二次大戦中に原爆を製造したマンハッタン計画を取り巻く構造基盤の秘密をはるかに凌ぐものになった。自由主義陣営の運命は危機に瀕していた。このため、秘密主義の闇の中で、技術的進歩をもたらす手段の開発に惜しみなく資金が注ぎ込まれた。国家存続のためにこのような秘密を必要とする文化が生まれ、秘密計画における“知る必要性を持つ者のみ (need-to-know-only)”の制約は、ローゼンバーグ事件を含むこの時代のよく知られた数々のスパイ事件により、さらに強化された。

しかし、一般的には正当化され得るこのような秘密の文化は、軍、情報機関、企業、研究所の複合体内部に不正な秘密が生まれる機会をも与えることになった。アクセスするために本来の意味での知る必要性が求められる適切に構築された機密分類の諸計画は、次第に“区画化 (compartmented)”され、制約され、謎に包まれるようになった。資金調達の仕事は複雑かつ不透明になり、計画の構造は作り話や“店頭 (store front)”工作により隠蔽されて事実上侵入不可能になり、このような計画の内部にいる人々は孤立を深めると同時に異様な力を手に入れたことを知った。

極度の秘密主義（それが絶対必要だと主張する人々も多いだろう）が、あり余る数十億ドルのいわゆる“闇の予算”を資金源とし、多くの超常的な現象や技術を扱う無法で非合法かつ強力な“認められざる特殊接近プロジェクト (unacknowledged special access projects ; USAPs)”という怪物を生んだのは、まさしくこの闇の内部であった。USAPsの世界では、区画化が著しく進み、知る必要性の制約はきわめて厳しく、情報はあまりにも重要であるため、米国、英国を始めとする諸国において、憲法に規定された当局による意味のある監督は全く不可能になった。ここで“認められざる (unacknowledged)”とは、本人がそのプロジェクトについて完全に知る必要性を持ち、活動に関与することを直接求められるのではない限り、誰もそのプロジェクトについて知らされることはない、という意味である。たとえ政府高官がそれについて訊ねたとしても、答は“そのようなプロジェクトは存在しない”である。

さらに、軍、情報機関、企業の計画を取り巻くいわゆる“回転ドア (revolving door)” 世界の環境が、企業と金融界の影響力を生み出したが、それは真の“国家安全保障” 上の利益や正当な公共の利益に反するものであった。とりわけ米国においては、軍事技術、研究開発計画、外部委託の公共事業や運營業務に向けられる数十億ドルの支出が、国家財政と私的利益の混同を起こしやすくした。このことは、計画の極度の区画化と相まって、国民の信頼の重大な悪用を許すことになった。

結局、このような計画 - 他の計画や企業の研究と入念に結びついた - の制約はきわめて厳重なものとなり、法的機関は常に当然のこととして蚊帳の外に置かれた。最終的に、蚊帳の外に置かれる人々には議会メンバー、さらには合衆国大統領も含まれるようになった。

実際に、アイゼンハワー大統領が政権を離れるとき、諸計画の運用はあまりにも複雑で制御不能になっていたため、彼は計画と開発の重要部分から閉め出されていると確信していた。そのとき以来、状況は飛躍的に悪化し、我々が今日推定するところでは年間およそ 1 千億ドルの資金が、大統領にも議会にも実質的に知られることなく、認められざる計画に流れている。

USAP と先進的エネルギーおよび推進システム

このような USAPs の“最重要部分” は、きわめて先進的なエネルギーおよび推進システムに関係する事柄である。1940 年代と 1950 年代、新しく生まれつつあった科学に関する幾つかの現象を研究するために、組織的な取り組みが行なわれた。その中に電磁気学および電気重力/磁気重力技術に関連する現象も含まれていた。それらには、切迫した国防プロジェクトにとって価値のある、エネルギーおよび推進システムを生み出す有望な可能性が秘められていたからである。

その時代、人々が UFO (unidentified flying objects ; 未確認飛行物体) と呼んでいたものに特別な関心が払われていた。重要なことは、UFO という言葉が新しくつくられたのが、そのような物体が未確認でもなく、従来の言葉の意味では決して“飛行していた” のでもないことが、闇の計画により発見されたまさにその後であったことである。実に、UFO に関連する情報や文化の大部分は、科学界、メディア、主流の政府機関による真剣な調査をかわすための偽情報である。人々は半世紀もの間、組織的に騙されてきたのである。

UFO としてよく記録に残されている空中現象の一部は地球外宇宙機 (* 異星人の輸送機) であるが、その他は闇の政府の進歩した航空機である。それらは、地球の生活に転換をもたらす得るエネルギーおよび推進技術を利用している。注目すべきは、人間の手になるそれらの装置が、不法な機密計画の中で行なわれた技術の研究開発 (と獲得)、および回収された地球外宇宙機の研究の成果であったということである。

ひとたび技術的飛躍が達成されると、これらのプロジェクトに関連する秘密は並はずれたものになった。実際に、これらの先進的なエネルギーおよび推進装置を取り巻く秘密の深さは、水爆の開発を覆い隠す秘密のそれをはるかに凌いだ。

以下は、1950年11月21日付のカナダ政府最高機密文書からの引用である：

私 [文書の作成者] は、ワシントンのカナダ大使館員を通じて慎重な調査を行ない、次の情報を得ることができた：

- a. この問題は、合衆国政府において水爆をも凌駕する最高度の秘密事項だ。
- b. 空飛ぶ円盤は実在する。
- c. その操作方法は未知であるが、バンネバー・ブッシュ博士に率いられた少数のグループにより集中的な研究が行なわれている。
- d. この問題の全体は、合衆国当局によりとてつもなく重要なものと考えられている。

大衆文化、メディア、タブロイド紙に見られる UFO の主題にまつわる愚かしい雰囲気とは別に、当時この問題が重要であったことは、米国、英国、スペインを始めとする諸政府が公開プロジェクトに公表した 2,000 ページを超える文書により、明確に立証されている。紙幅の関係でその抜粋さえもここに掲載することはできないが、これらの文書の一部は公開プロジェクトのウェブサイトで見ることができるし、著者による本 'Disclosure' の中でも概説されている。

今日、UFO の主題は大抵の場合、笑い、困惑、拒絶の反応を引き起こす。確かにこれは理解できることなのである。この主題について話され、書かれ、映像化され、またはそれ以外の方法で一般に公表されるあらゆる情報の少なくとも 99 パーセントは、完全に事実と異なるからである。しかし権力の中核 - とりわけ闇の計画の中核 - では、UFO 問題は最重要事項である。その理由は、この謎の中心に多くの科学が存在しており、それは一世代のうちに石油、化石燃料の必要性とそれに関連する汚染を解消し、我々が知っている貧困のない、真に持続可能な世界文明を築くからである。UFO の主題についてまわる執拗な冷笑は、周到かつ計画的に行なわれている：それは、産業革命から今日に至るまでに生じた変化が桁違いに小さく見えるほどの変化を引き起こす、深遠な多くの科学を隠蔽する。初代 CIA 長官のロスコー・ヒレンケッタ提督は、次のように述べた：

今こそ、真実が明かされるときだ... 舞台裏では空軍の高官たちが本気で UFO に関心を持っている。しかし、職務上の秘密とあざけりにより、多くの市民が未知の飛行物体は馬鹿げていると信じ込まされている... 未確認飛行物体についての秘密によりもたらされる危険を減らすために、議会は直ちに行動を起こすよう、私は強く求める...

我々は、これらの UFO 問題とつながりのある事象および計画を証言する、軍、企業、情報機関、研究所の 500 人近い証人を確認している。証拠は確かであり、信頼のおけるものである。我々は、2001 年 5 月にワシントン DC のナショナル・プレス・クラブにおいて記者会見を開催した。この会見では、20 数人の証人がこの主題に直接関わったことを証言し、それに関する文書を提示した。これは史上最も視聴率の高いウェブ放送であった。最終的には百万人を超える人々が、インターネット上でこの会見を見た。この会見は、CNN, CNN インターナショナル、さらには BBC, ボイス・オブ・アメリカ, プラウダ, 新華社, テレムンド, 'ザ・ワシントン・タイムズ' のような、世界の主要ネットワークで報道された。数万人の人々が大統領と国会議員に要請文を書き、この主題の調査と情報の全面的な機密解除を求めた。

それから 9.11 が起きた。米国議会は愛国者法、およびイラク戦争を含む別の事態の展開を考慮し、この UFO 問題を追及しないことを選んだ。しかし、継続される秘密によって甚大な被害を受ける国際社会は、その直接の犠牲者である。それゆえに国際社会は、UFO の主題に関するこれらの問題を調査するための原動力となるべきである。

専門家の証言者による証言

UFO の主題が現実のことであり、それが不法に扱われていることを確実に論証する、十分な証拠、文書、物理的裏付け、および証言がある。1992 年を始まりとして、我々は米国、英国、国連、その他の機関の政府高官たちと会合を持った。そこで知ったのは、この問題を解決し、事実を全面公開することへの関心が驚くほど高かったことである。高官たちは米国上院情報委員会からクリントン政権の初代 CIA 長官に及び、その中には米国防総省および英軍一般幕僚のきわめて高い地位にある提督や将軍も含まれていた。UFO の主題が人類の未来にとり途方もなく重要な意味を持つこと、またそれを秘密にすることが許されなくなったことについては、幅広い合意がある。

これまで欠けてきたのは、UFO 問題に対して意味のある行動を起こそうとする意志である。公開に向けた関心と心情的支持は高いが、恐怖はさらに大きい。以下に紹介する何人かの最高機密“内部告発者”が、この秘密について何を語り、それがどのような恐怖を与えたのか、考えて欲しい：

スティーブン・ラブキン准将： 陸軍州兵予備軍。彼は若い陸軍将校として、アイゼンハワー政権最後の数年間を大統領のもとで勤務した。

だが、起きたのはアイゼンハワーが裏切られたということだった。彼はそれを知らずにいたから、UFO 情勢全体について統制を失ったのだ。彼は国民に向けた最後の演説で、用心しないと軍産複合体に後ろから刺されると語っていたのだと思う。彼は油断していたと感じたのではな

いか。彼はあまりにも多くの人間を信用し過ぎたと感じたのではないか。アイゼンハワーは疑いを知らぬ人間だった。彼は善良だった。そして、あるとき突然、この問題が企業の管理下に入って行きつつあることに気付いたのだと思う。それはこの国を大きく損ねる可能性があった

私の記憶では、この失意は何箇月も続いた。彼は UFO 問題への統制を失いつつあると気付いた。この現象というか、とにかく我々が直面していたものに関して、最適な管理がなされそうにないことを彼は悟った。私が思い出せる限りでは、'最適な管理がなされそうにない' という言い方だった。本当に心配していた。そして、結果は...

もし私がこれについて話したなら、軍の人間である私に何が起きるか、このことを私は多くの機会に議論してきた。政府は、絶望的な恐怖を植え付けることで秘密を強化するという、現代の記憶に残る何よりもよい仕事をしたと言えるだろう。

ある古参将校と私は、もし暴露したら何が起きるかと話したことがある。彼は消されるということについて話していたので、私は“その、消されるとはどういう意味ですか？”と訊いた。そうしたら、彼はこう言った。“だから、君は消される、姿を消すことになるんだ”私はさらに訊いた。“あなたはどのようにしてそんなことを知っているのですか？”彼の答えは次のようなものだった。“私は知っている。こうした脅迫はずっとこれまで行なわれ実行されてきたのだ。脅迫が始まったのは 1947 年だ。陸軍航空隊がこの件を絶対統制するように任された。これはこの国が今まで対処した最大の治安問題なので、消された人々もこれまで何人かいた...”

あなたがどんな人間であろうと関係ない。あなたがどれほど強くて勇気があろうと関係ない。その状況はまさしく恐怖と言える。マット [この古参将校] がこう言ったからだ。“彼らが追うのは君一人だけではない。彼らは君の家族につきまとうだろう”彼はそう言ったのだ。だから、私に言えることはこうだ。彼らは恐怖に陥れることで、それをこんなにも長い間秘密にしてきたのだ。彼らは見せしめをつくることに非常に長けている。それがこれまで行なわれてきたことなのだ

ジョナサン・ウェイガント上等兵： 米国海兵隊。南米における UFO 回収に立ち会った。

“お前はそこにはいなかった” “お前はこれを見てはなかった” “お前を行かせたら危険だ” 彼らは実際に私を殺そうとしていたのだと思う...

殺人を請け負う、恐ろしい部隊が動員されてきた。知らない人もいるだろうが、私は海兵隊の狙撃手のことを知っている。他の誰かがそれについて話しているのを聞いたこともある。これらの連中は街に出て行ってこっそり人の後をつけ、殺す。陸軍空挺部隊の狙撃手も同じことをしている。彼らはデルタフォース (*陸軍特殊部隊) を使い、これらの人々を捕捉し、殺して黙らせるのだ。

ラリー・ウォーレン： 米国空軍、保安兵。英国ベントウォーターズ空軍基地において UFO

が着陸したとき現場にいた。

我々はガイガーカウンターで入念に調べられた。一人から反応があり、彼のポケットから何かを取り出された。この同僚はすぐに排除された。命にかけて誓うが、その後再び彼を見たことはない！彼は排除されたのだ。これは多くの人に起きたことだった。空軍が責任を負うべき自殺も 1 件あった。これは実際の名前を持った実在の人間だ...

ダン・モリス曹長： 米国空軍，国家偵察局（NRO）諜報員。

私はその情報を調査し、収集するグループの一員になった。当初、それはまだブルーブック、スノーバード、その他の秘密プログラムの傘下にあった。人々が何かを見たとき主張したとき、私は彼らを訊問し、彼らが何も見なかったか、見たものは幻覚だったことを納得させようとした。それがうまくいかなかった場合、別の一団がやってきてあらゆる脅しをかける。彼らとその家族を脅したりする。彼らの仕事はその人々の信用を落としたり、いかれた人間に仕立て上げたりすることだ。それでも効果がなかった場合には、また別の一団がいて、どうにかしてその問題に終止符を打つ。

ロバート・ジェイコブズ教授： 米国空軍。彼は初期の ICBM 開発実験を妨害した UFO を映像に撮った。

[その事件について] ある記事を公表した後で... 私は仕事で嫌がらせを受け始めた。日中に奇妙な電話がかかり始めた。私は夜に自宅で電話を受けるようになった - 一晩中、ときには午前 3 時、午前 4 時、夜中の 10 時に、相手は電話をよこし、私に喚き始める。“くそつたれ（印刷に適しない罵り言葉）！ くそつたれ！” 彼らが言うのはこれだけだ。彼らは私がとうとう受話器を置くまで喚き続ける。

ある夜、何者かが大量のロケット花火を放り込んで、私の郵便受けを爆破した。郵便受けは炎を上げて燃えてしまった。その夜の午前 1 時に電話が鳴った。受話器を取ると、何者かがこう言った。“郵便受けの夜のロケット花火、きれいだったぞ！”

こんなことが 1982 年以来、繰り返し起きている...

UFO 問題の周辺を縁取るこの気違いじみた物事は、その真面目な研究を抑えつける協調した作戦の一部だと私は考えている。この問題を真面目に研究しようとする、いつでも誰でも嘲笑の対象になる。私は比較的主要な大学の正教授だ。私が未確認飛行物体を研究することに興味を持っていると聞いたら、私の大学の同僚たちは私を笑い、私の後ろであれこれ大声で揶揄することは間違いない - 未確認飛行物体はまさに我々が共存すべき物の一つなのだが...

マンスマン少佐が私や他の人々に語ったように、そのフィルムに起きたことは、それ自体興味深い話だ。私が立ち去ってからしばらくして、私服の男たち - 私は彼らを CIA（中央情報局）

と考えたが、彼は違うと言った。それは CIA ではなく他の何者かだった - がそのフィルムを取り上げ、UFO が写っている部分をリールから外し、はさみで切り取った。そしてそれを別のリールに巻き、書類カバンに入れた。男たちは残りのフィルムをマンスマン少佐に返し、こう言った。“機密保全誓約違反に対する罰則の厳しさは、説明する必要がないですよ、少佐。この事件は片づいたことにしましょう” 彼らはフィルムを持って立ち去った。マンスマン少佐がそのフィルムを再び見ることはなかった。

メルル・シェーン・マクダウ： 米国海軍大西洋軍

その二人の男は、この出来事について私に質問を始めた。正直に言うと、彼らはとても手荒だった。私は文字どおり両手を上げて、こう言った。“あなたたち、少し待ってください。私はあなたたちと同じ側にいる。ちょっと待ってください” 彼らはまったく乱暴だったからだ。とても脅迫的で、はっきりと次のように言った。何も見なかったし、聞かなかった。何も目撃しなかったし、知られたことはこの建物から消える。‘君たちはこれについて同僚に一言も言っはならない。また、基地を離れたら、これについて見たり聞いたりしたことは忘れる。何も起きなかったんだ...

ジョージ・A・ファイラー三世少佐： 米国空軍

私は時々核兵器を運んだものだ。つまり、私は核兵器を運ぶことには気持ちが慣れていたが、UFO を見ることに関してはそうではなかった。この批判、この嘲笑こそが、真実が明るみにならないようにするためのほぼ最良の方法だった。

ジョン・キャラハン： 米連邦航空局 (FAA) 事故調査部長

... 質問が終わると、彼らはそこにいる他の人々全員に対して、実際にこう断言した。この事件は決して起きなかった。我々はこの会合を持たなかった。これは決して記録されなかった...

それは CIA から来た一人だった。いいですか？ 彼らはそこにいなかったし、この会合もなかった。そのとき、私は言った。しかしあなたがなぜそう言うのか、私には分からない。つまり、そこには何かがあった。それがステルス爆撃機でないなら、ご存じのとおり、それは UFO だ。そしてもしそれが UFO なら、なぜあなたたちは人々にそれを知られたくないのか？ すると彼らは皆感情を高ぶらせた。あなたはそれを口にするさえ考えてはならない。1 機の UFO が 30 分間レーダーに捉えられたデータは、彼らにとって初めてだと彼は言った。彼らは皆そのデータを入手し、それが何もので何が実際に起きていたのか、知りたくてうずうずしていた。彼はこう言った。もし彼らが公の前に出て、米国民に対して UFO にそこで遭遇したと言ったなら、国中にパニックを引き起こすだろう。だから、あなたたちはこれについて語ってはいけない。そして彼らはこのすべてのデータを持ち去ろうとした...

... CIA が我々に、これは起きなかったしこの会合もなかったと言ったとき、このことが進行

中であることを彼らは国民に知られたくないのだと私は思った。普通なら我々は、これがあつたあれがあつたという類のニュースを流すものだ...

要するに、この UFO 問題に関連する秘密の保持が、あまりにも冷酷かつ執拗に行なわれてきたために、今日までこの問題に立ち向かおうとする組織はなかったし、指導者もいなかった。実際に、我々は 1993 年に CIA 長官ジェームズ・ウルジーと会い、この秘密を終わらせ公開を促進するために、クリントン大統領が直接大統領権限を行使するよう提言したが、その後で我々はその恐怖の大きさを目の当たりにすることになった。その会合の後で大統領の友人が我々を訪ね、こう告げたのである：“もし大統領があなたたちの提言どおりに行動したなら、彼はジョン・ケネディ [大統領] のような最後を遂げることになると思う” もちろん、我々は最初大笑いした。しかし彼は我々の笑いを制止し、このような懸念が現実のことだと語ったのである。我々は呆然とした。それまで我々は、そのような懸念を陰謀論のごみ箱に放り込んでいた。しかし、恐怖とこれらのプロジェクトが世界中で行なっている冷酷な統制が、UFO 問題を効果的に社会のレーダー画面から外れたままにしてきたように思われる。我々の考えでは、統制の手段としてこのような恐怖を広めることは、国際テロリズムのまさしく一つの形態である。その効果は壊滅的である：それは民主的な組織とプロセスを無力化し、身もすくむ恐怖を引き起こし、人類の未来を乗っ取り、数十億の人々を貧困にし、人間一代の間に地球環境を破壊し尽くす。実に、このような無法な秘密が及ぼす悪影響の大きさは、今日活動しているどのようなテロリスト組織の所業と比べても桁違いである。

それに続く議会メンバーおよび高官たちとの会合では、非常に強い懸念 - むしろ動揺 - が示された。しかし、彼らは何の行動も起こさなかった。高い地位にある多くの人々は、このような認可されていない秘密に懸念を示した。しかし、彼らはこう言いながら、責任を他に転嫁した：“なぜあなたたちは、別の委員会の誰それに会って、公聴会を開かせないのか？”

別の証人たちは、これらの活動を以下のように述べている：

ポール・シス博士：マクドネル・ダグラス専門技術者

闇の予算の世界はあの親しげな幽霊キャスパーを描写するのに似ている。彼の漫画を見ることはできるが、それがどれくらい大きいのか、その資金がどこから来るのか、どれくらいの数があるのか、その区画化と守られる誓約のために知ることはできない。私がいた場所で働いていた人々の今を知っているが、もしあなたがそれについて彼らに訊いても - たとえインターネット上で論じられていたとしても - 彼らは“知らない、あなたは何を言っているのか”と言うだろう。彼らは今 70 歳台だが、依然としてあなたが言っていることを知っているときえ決して認めないだろう。あなたには見当もつかないことだが、たぶんそれはあなたが考えるよりも巨

大だ。

ジョン・メイナード氏： DIA（国防情報局）職員

この問題に関与している企業の中で、アトランティック・リサーチ社は主要なものの一つだ。だから、これについてはあまり頻繁には聞かれない。その目立たない存在をそう呼びたいければ、これは内部にいる環状道路沿いの悪党（beltway bandit）（*ワシントン D.C.の環状道路沿いに事務所を構え、主に米国政府との事業契約を助けるコンサルタント）だ。その仕事の大部分を情報機関の内部で行なう。TRW、ジョンソン・コントロール、ハネウェル。これらのすべてがどこかの時点で情報分野に関わるようになった。ある種の仕事、活動は彼らに請け負わされた。アトランティック・リサーチはずっと以前からその一つだった。これらは“環状道路沿いの悪党”になるためにペンタゴン（国防総省）の人々によってつくられた組織で、ある極秘の区画化されたプロジェクトを実行するために、プロジェクト、助成金、資金を受け取っていた。あまりにも秘密で区画化されていたために、何が行なわれているかを知る人間は四人ほどにすぎなかっただろう。それほど、それは厳重に統制されていた。

エドガー・ミッチェル： 宇宙飛行士

どんな活動が行なわれていようとも、それが秘密の、準政府的な、準民間のグループである限り、私が知る範囲では政府によるどのような種類の監視も伴わない。これこそが大きな懸念なのだ。

ミッチェルは後日メディアにこう述べたと、セントピーターズバーグ・タイムズ紙 2004 年 2 月 28 日版が報じている：“異星人たちは着陸した... ごく少数の部内者たちが真実を知っており、その遺体を研究している... 部内者たちの陰謀グループは、ケネディ大統領以後、大統領に ET に関する背景説明をしなくなった”

クリフォード・ストーン軍曹： 米国陸軍

... 彼らはすぐに出てきて、こう言う：“我々は秘密を隠しておけない、秘密なんか隠しておけるものじゃない”では、本当はどうか。秘密は隠しておけるのだ。

国家偵察局（NRO）は何年もの間秘密のままだった。NSA（国家安全保障局）があるかどうかさえも秘密だった。原子兵器の開発は、それを一回爆発させ、何が進行しているかを一部の人々に言わなくてはならなくなるまで秘密だった。

... 私は空軍が認めた秘密文書を入手した。私がさらに多くのファイルを公開させるために議会の議員たちの助けを借りたとき、それらの文書は直ちに破棄されてしまった。私はそれを証明することができる。

文書を保護する仕組みと秘密のプログラムを実行する仕組みを議会が精査したとき、彼らは特殊接近プログラムの内部に特殊接近プログラムがあることを知った。つまり、そのすべてを議会が管理統制することは本質的に不可能だった。信じてほしい、そのすべてを管理統制することなど、本質的に不可能なのだ。

さて UFO の場合、それと同じ原則が適用される。こうして、情報関係機関内の 100 人以下の小さな核、いや私はそれが 50 人以下であることを知っているが、それがすべての情報を支配している。それはまったく議会の調査や監視の対象ではない。

ロバート・ウッド博士： マクドネル・ダグラス・エアロスペース技術者

ご存じかもしれないが、これらの機密計画の一つに接近を許されると、特別なバッジをつけ、その部屋にいる誰とでも大変率直に話ができるようになる。そして心のつながりを持ったグループの一員のように感じる - そこには大きな仲間意識が形成されている。こうして、その特別な資料庫を利用することが可能になった。そこで我々にできることの一つは、空軍が運営する資料庫に行って、いわば遠慮なく極秘資料を渉猟することだ。私は UFO に関心があったので、やるべき通常の仕事があったときにはついでに彼らの資料庫を覗き、彼らが UFO についてどんな資料を持っているのかを知ろうとした。約 1 年の間に、私は様々な報告書の中にこの問題に関する相当数の資料を見つけ出していた。そうしたら、まったく突然にその問題の全資料が消えてしまった。その問題の分類全体がまさに消えたのだ。一緒に働いていた我々のグループの資料庫係は、この資料庫に 20 年間いるが何事も正常だったと言った。そしてこう言った。これは異例のことだ！ こんなことは初めてだ。君は一つのテーマをまるまる失った。それは君を逃れて消えたのだ。君は何かを探り当てた...

そうこうしている間に、もう一つ別のことが起きた。それはジム・マクドナルド（著名な UFO 科学捜査官）との付き合いから生じた。私はヤツが好きだった。彼は実に精力的な物理学者で、何事にも躊躇しなかった。彼はある事実をつかむと、何としても専門家の学会で圧倒的に説得力のある話をしようとした。彼は、米国航空宇宙航行学会と米国物理学会でよく話したものだ。私はたまたま両方の会員だったので、彼が町に滞在しているときにはいつも車で迎えにいった付き添い、彼が歓迎されていると感じられるようにしてやった。

あるとき私は、旅行で彼の住んでいたツーソンを通りかかった折にそこに立ち寄った。私には 2 時間の飛行機の待ち時間があった。彼は空港に出てきて私とビールを飲んだ。私は“何か新しいことはないかい、ジム？”と言った。彼は“どうやらつかんだらしい”と言った。私が“何

をつかんだんだい？”と訊いたら、彼は“答えをつかんだようだ”と言うじゃないか。だから私は“それは何だい？”と訊いた。彼は“まだ君には話せない、確かにつかんだんだ”と言ったのだ。彼が拳銃自殺を図ったのはそれから 6 週間後だった。数箇月後、彼はとうとう亡くなった。

我々の防諜活動員が用いる技法について、私には今思い当たることがある。ジムに自殺を決心させる能力を、彼らは持っていたのだ。それが事の真相だったに違いない...”

この問題を効果的に制御しようとしたら、あらゆる段階でそれを行なう必要があるのは明らかだ。最もはっきりしている段階はメディア（情報媒体）だ。だから、あらゆる種類のメディアに目を配る必要がある。映画、雑誌などだ。言うまでもなく、初期の頃は新聞、映画、雑誌がすべてだった。今や我々はインターネットやビデオなど、他のあらゆる種類の媒体を持っている。しかし、これらの分野の技術が進歩するに伴い、この制御を心配する者たちが、媒体と共にまさにこの分野に入り込んできている。こうして、新しい媒体が出現するたびに、彼らはそれに対応する新しい制御手段を持つのだ。

読者が注目すべきは、我々はあらゆる機関および軍の部門、秘密に荷担している選ばれた企業から、このような信用資格を持つ 500 人近い証人を集めているということである。

この秘密を保持しているグループは、少なくとも政策レベルでは 200 ないし 300 人で構成され、いくつかの国にまたがっている。彼らは各界の強力な利害勢力を代表しており、その中には金融、技術、安全保障、宗教、メディア、政治、科学の分野とつながりを持つ人々が含まれる。1993 年にこのグループ内の複数の接触者が我々に断言したことは、関与している人々の約 3 分の 1 は、秘密を終わらせ広範な公開を行なうことに賛成している、ということであった；今日の時点で、我々は 4 割を超える人々がこれを支持していると推定する。そのようなグループがこれほどの秘密を抱えたまま、いつまでも逃亡を続けることなどできるはずがない、と考えるのは正しい。我々は、起訴するのに十分な情報、情報源、文書を入手している。我々には、名前、計画コード番号、活動が行なわれている場所、企業の所在地、および関係する重大情報がある。しかし、この情報を誰に、何のために公開するのか？

これらの技術と活動に関係する秘密は、無法、違憲、有害なのであるから、どのような政府機関または国際機関も、公聴会を開き、そこで証人と証拠を提示することができると考えられる。公開プロジェクトと連携する法律専門家および国家安全保障専門家たちは、次のように判断している：秘密は管理されておらず、法の枠外にある。それゆえ、そのようなプロジェクトの指導者たちは、このような秘密を強制する正当な権利を持たない。これが意味するところは、秘密を保持している人々は、それが過去のものであれ現在のものであれ、機密保全誓約によって憲法上の拘束を受けることはもはやない、ということである。この評価を政府高官たちに伝

えたが、これまでどの機関、当局者によっても、この見解が問題にされたことはない。

意義深いことには、上記のナショナル・プレス・クラブで開催された記者会見を準備している間、またそれが終わった後でも、公開プロジェクトのスタッフや内部告発者の中で、何らかの方法で脅迫されたり、口封じをされたりした人はいないということである。我々は、秘密の証拠とともにその不法性を決定的に論証することができる能力を維持している。だから、どのような組織も我々を沈黙させることはできない。

公開に向けた行動要請

これらの法律上の議論はさておき、この秘密を終わらせるための切実な道德倫理上の理由がある。第一に、これらの計画により獲得された重要な科学技術が公表されないでいるために、人類は無用の苦しみを受けている。

これらの技術は、いわゆる量子真空状態 (quantum vacuum state) から有用なエネルギーを引き出すことを可能にする。これは、アフリカやインドのあらゆる村が、配電網に頼らないエネルギー源を持つということである。このエネルギー源は、装置を取り巻く空間からエネルギーを引き出すのであり、燃料を燃やすことも発電所から送電線を引くことも不要である。このような“フリーエネルギー”発生装置は、貧困、汚染、経済停滞、等々に関して絶望的に思える世界の現状を、完全に転換する。

第二に、世界は新しい基幹技術から利益を得ることになる。化石燃料および原子力を、これらの新しい先進的なエネルギーおよび推進システムで置き換えることの意味は、どれだけ誇張してもし過ぎることではない：地球の生活のあらゆる側面が影響を受け、真に持続可能な先進技術文明が築かれる。開発途上世界は、産業汚染や費用のかかる集中型公共施設を必要とする段階を飛び越して、直ちに家庭内発電 (point-of-use power generation) の段階に移行することができる。

飛躍的な繁栄がもたらされ、教育が盛んになる。地球温暖化は止まり、汚染の大部分は抑制される。海水の淡水化は費用のかからないものとなり、砂漠化の進行を食い止め、資源の枯渇を防ぐのに役立つ。また、石油戦争はもはや起きることがない。

第三に、これらの秘密計画の公開により、否定的な結果が生じる可能性がないわけではない。このような新技術は不安定をもたらす軍事目的に応用されるのではないかと、という議論があるかもしれない。確かにその通りである - あらゆる新技術は戦争目的に利用される。このことはしかし、ある重要な問題を提起する：我々は一つの文明として、人類が惑星殺し (planeticide) - 惑星全体の死滅 - をするのを見る覚悟ができていないか？ 平和な世界を創造する責任から逃れられるということだけのために？ 世界の状態は、石油、石炭、太陽光や風力発電の表面的部分をいじくり回すだけで大きく改善されることはない。我々は、環境崩壊、爆発的に増加

する貧困層，世界的な政情不安と戦争に直面している。この状況がある一方で，これらの問題を包括的に解決する手段が，闇の中に置かれたままになっているのである。

今や，これらの技術を適切かつ注意深く公開し，利用する時である。国際司法裁判所および他の国際機関は，事実を調査し公開するため，またこれらの新しいエネルギーおよび推進システムの解放を促進するために，先導的役割を果たさなければならない。公開プロジェクト（The Disclosure Project；ディスクロージャー・プロジェクト）は，政府の指導者たち，組織，機関に対して，情報の全面的な提供と背景説明を行なう用意がいつでもできている。

国際社会は，これらの問題を調査しなければならない - そして見て見ぬふりを止めなければならない。我々の最も差し迫った諸問題の解決策を公表しないでいる不法な秘密が，少なくとも現代における最大の道徳的，政治的危機の一つであることは間違いない。

公的資金で賄われながら“乗っ取られた”研究を，全人類のために役立つ時が来たのである。解決策が悪意を持って意図的に公表されないでいる一方で，60億の人間が自分たちの故郷惑星を切り刻むようにして生き続けている状態は，放置することができない。死にかけている石油経済を支える金融資本その他の利害勢力がいかに巨大であろうとも，我々は石油依存症により全人類をその道連れにさせる訳にはいかない。

それよりは勇気と慎重さをもって真実を公開し，これらの驚くべき科学が人類に平和で豊かな地球の生活をもたらすことができるようにしよう。これは実現不可能な夢ではない。そのような世界を創造する手段を我々はすでに持っている。今我々は，意思を持たなければならない。

（訳：廣瀬 保雄）